大障教ニュース

大阪府立障害児学校教職員組合
大阪市天王寺区東高津町７－１１
府教育会館７０４号
(TEL)6765-8904
(FAX)6765-8905

養護学校義務制４０年 子どもから出発する実践を語り合おう

障害者権利条約の理念の実現と障害のある子どもたちの発達保障を

第19回全国障害児学級&学校学習交流集会・in兵庫

1月11日(土)～13日(月・祝)の3日間、兵庫県・神戸市で「第19回全国障害児学級&学校学習交流集会」が開催され、全国から800人を超える教職員・研究者などが参加しました。大障教からも23分会58人が参加し、うち17人が青年組合員でした。

集会は、1日目に開会全体会(養護学校義務制40周年企画と記念講演)がおこなわれ、2日目の午前は、14の「てんこ盛り講座」と「文化バザール」、午後からは、障害種別や発達段階、テーマごとに16会場に分かれての「旬の実践分科会」、子ども理解を深める「基礎講座」が開催されました。また、特別分科会として、阪神・淡路大震災の震災遺構を訪ねるフィールドワークもありました。

最終日には、4つの教育フォーラムが開催され、それぞれのテーマで活発な討論で深め合いました。

時代を超えた「切なる願い」に応えるために

三木裕和さん

養護学校義務制40年企画として、三木裕和さん(鳥取大学)は、「時代を超えた『切なる願い』に応えるために」というテーマで講演をしました。

三木さんは、1979年の養護学校義務制実現は、「全国の保護者や教職員の要求運動によって実現したものである」と述べ、アジア・太平洋戦争以後、学校に通いたいと願う障害のある子どもたちの教育権が保障されていなかった「就学猶予・免除」の歴史や義務制以後も続いてきた高等部教育、訪問教育など障害児教育の教育権運動について語りました。

また、「教育の中身でもたたかいが続いている」として、清掃検定などの職業技能検定に見られるような教育を一例に、「学校教育が子どもたちにとって、『明日も行きたいと思える学校』『希望のあるもの』になっているか、教育の内容がいま問われている」「子どもたちの学校に行きたいという『切なる願い』を40年の歴史の中で私たちがどう受け止めるのか、一緒に考えていきましょう」と問いかけました。

障害児教育の魅力を改めて見つめなおそう

赤木和重さん

記念講演として、赤木和重さん(神戸大学)は、「障害児教育の魅力を改めて考える：発達理解の視点から」というテーマで講演をしました。赤木さんは、はじめに「今の学校は、子どもも教員も追いつめられていくような教育現場になっていないか」「生産性の低さを知らず知らずのうちに障害のある子どもにあてはめるような見方となっていないか」と問題提起し、その背景には、「できないことをできる」ようにさせる(「できる」のノロイ)ことにとらわれ、子どものねがいやなやみを無自覚に「見えなくなる」可能性があることが問題であると鋭く指摘しました。そして、「できる」のノロイをほどく鍵は、発達的視点から「障害児教育の魅力を改めて見つめなおすこと」にあると述べました。

赤木さんは、障害児教育の魅力について、「障害のある子どもの発達していく姿をとおして自分の子どもをみつめるまなざしの狭さや浅さに気づく。そして、それがきっかけで自分の考え方や価値感が変わっていく」と同時に「まなざしを規定する社会の矛盾を感じることができる」と述べ、発達を学ぶことで、できるできない以外のものさしに気づき、「障害のある子どもの『愛おしさ』と『尊厳』を感じられる」と語りました。

最後に、「障害のある子どもの教育の目的は、社会のお荷物にならないような子どもを育てることではなく、社会を変えていける子どもを育てること」というヴィゴツキーの言葉を紹介し、あそび心や発達を充実させることが子ども理解を深め、「学校教育や社会を変えていく原動力になる」「私たちの『できる』のノロイを規定する社会を変えていくことができる」と述べ、「障害のある子どもたちから学んでいこう」と参加者に呼びかけました。

大障教ホームページアドレス　http://fc06331220171211.web2.blks.jp/　Eメール アドレス ： fushoukyou_1@mtb.biglobe.ne.jp

書記局のひとりごと

滋賀の湖北、山本山にオオワシが越冬に来ているので観察に出かけた。

オオワシは、翼を広げると二m四十cmにも達し、日本で観察できる一番大きなワシ。体は黒と白で、嘴が黄色と猛禽類では目立つ姿をしている。日本では北海道で越冬するが、まれに本州でも越冬する個体がある。

湖北のそれは翼の白斑の特徴から「山本山のおばあちゃん」の愛称で親しまれ、二十二シーズン連続の飛来。推定年齢は二十七歳以上。「山本山のおばあちゃん」は二代目で、一九九八年十二月に対岸の葛籠尾崎で発見され、二〇〇三年二月に亡くなった初代に代わって山本山に移ってきた。

初代は、最後の四日間は何も口にせず、四日目に雪を食べたところが観察されたのが最後だったとか・・・。

ワシとタカの違いは、大きい方が「ワシ」で小さい方が「タカ」。湖北野鳥センターの職員に教えていただいたが、オオワシは視力がすこぶる良くて、二km先の獲物を見つけることができるそうだ。大きな体ゆえ飛び上がるのにエネルギーが必要なため、空中で旋回して獲物を探すことは稀で、山本山から琵琶湖の獲物に狙いを定めているとのこと。双眼鏡やフィールドスコープで観察している人間を「山本山のおばあちゃん」はどのように見ているのだろうか。

湖北では、同じ場所に十一時間も留まっていた記録もあり、悠然と飛ぶ姿を見たかったが、それは叶わなかった。

「おばあちゃん」は、二月末にはオホーツクを越えて北へ渡る。鳥にとって「渡り」は命がけ。次の十一月、越冬にくる元気な「おばあちゃん」に、また会いたい。(久)

ブロック別学習会シリーズ⑥

堺・泉北・泉南ブロック冬の教研集会
福祉と教育の連携について学びました

12月15日、堺市内で「堺・泉北・泉南ブロック冬の教研集会」が開催され、4分会5人が参加しました。「福祉と教育の連携」というテーマで、森繁樹さん（堺市立重症心身障害者（児）支援センター「ベルデさかい」事務局次長）が講演をおこない、参加者で意見交換しました。

森さんは、はじめに障害児・者施策の発展過程として、1947年児童福祉法以降の戦後社会福祉制度の確立期～最近の流れまで様々な福祉制度の歴史や「支援費制度」「障害者自立支援法」「障害者総合支援法」施行など障害者福祉施策の歴史について紹介しました。また、障害者総合支援法に基づくサービスのひとつである、障害のある人が福祉サービスを利用した際に、行政が費用の一部を負担する「自立支援給付」（介護給付費や訓練等給付費など）について詳しく説明しました。最後に森さんは、「障害者総合支援法が施行され、多くのサービスが用意されている反面、仕組みが複雑でわかりにくくなっている」「学校と福祉が相談し合える関係性が大切である」と語りました。

後半の交流では、放課後等デイサービスについての話題が出され、「就職に特化」したデイサービスや「高等支援学校入学を目指す塾」のようなデイサービスがあるなど情報交換しました。

また、障害のある子どもたちが高等部卒業後に地元で生活していくためにも福祉との連携を充実させていくことの必要性などが語られました。全体を通じて、学校現場では普段聞くことのできない「福祉」について学び合う集会となりました。

全国障害児学級・学校交流集会に参加して（感想その1）

第19回全国障害児学級＆学校学習交流集会が開催され、大障教職場からも、58人が参加しました。参加者から感想が寄せられていますので、大障教ニュースの紙面で紹介していきます。

なかまと話しながら考えていく学校づくり

今年は近い神戸での開催なので、通いで参加しました。

養護学校義務制40年の年ということで、初日から素敵な2名の講師のお話が聞けるのが魅力でした。阪神・淡路大震災から25年でもある今年、現地企画のオープニングの曲「しあわせはこべるように」に胸を打たれ、また、障害のある青年たちのノリノリのダンスや新喜劇の熱演に、「明るい将来をつくっていかなくては」と、元気をもらいました。三木先生の講演を聞いて、学校に行きたくても行けなかった就学猶予の時代から、子どもたちの要求は同じであり、安心して過ごしたい、学びたいという要求を私たちは大事にできているだろうか、と改めて考えました。赤木先生の記念講演では、「できないことができるようになる」ことだけ求めていると無自覚に子どものねがい・なやみが見えなくなる怖さを知り、学習会にこうして毎年参加し、なかまと語り合う重要性を感じました。

2日目に参加した改訂学習指導要領の講座では、各県での様子が報告されました。「新学習指導要領」体制の中で、「～しなければならない」という指導がいろいろな形で進められていますが、「子どもにあった学びを作り出すこと」「『今』を充実させること」「失敗しても大丈夫と安心して学べること」を大事にして教材研究を行うこと、子どものこと、授業のことを自由に語り合えるなかまをひろげることが重要と教えていただき、不安な気持ちが払拭されました。午後の青年期の分科会では、子どもたちが主体的に活動する事例が紹介されました。高等支援学校での文化的な行事の取り組み、自分たちでルールを作る取り組み、支援学校高等部の泊行事にどう参加するか担任と相談しながら自分で決定した事例など、子どもたちのねがいに寄り添い、自己決定できる学校の雰囲気に心がほっこり温まりました。泊行事の参加事例は、自分のクラスの生徒とも重なり、共感できました。今年も、子どもを中心にして、なかまと話し合いながら考えていく学校づくりが大切だということを学びました。

（枚方支援学校分会　佐々木起美子）

参加者の感想です！

○福祉についてなかなか知る機会がなかったため、貴重な学習会になりました。教員がもっと「福祉」のことを学ぶ必要があると思いました。

○現在の福祉サービスについてお話があり、知らないと使えない福祉サービスが多いことを知りました。

○学校現場では、児童生徒の「個別の教育支援計画」など学校卒業後に向けてのことを考えていますが、更にその先の福祉につなげる「先まで見通した支援の充実」の重要性を感じました。